

柔道整復師国家試験に出題された問題の傾向 －柔道整復理論に着目して－

田辺 達磨, 松本 揚, 大澤 裕行

了徳寺大学・健康科学部整復医療・トレーナー学科

要旨

柔道整復師国家試験（以下、柔整国試）は現在まで22回実施されている。第1回柔整国試では1066人、第22回柔整国試では7102人が受験者をしている。第1回に比べて受験者は著しく増加している⁴⁾。

その柔整国試の合格率は、第22回柔整国試では75.3%であった。第1回柔整国試では90.3%であったことから、第1回に比べると合格率は低下している。しかし、新卒だけを見ると第1回の合格率が92.4%、第22回は91.3%であり、大きな差はみられない⁴⁾。

第1回から第22回の柔整国試の合格率に変化がみられないということは各学校で行われている柔整国試の対策が失敗していることを示唆しているといえる。本調査では、柔道整復師国家試験における柔道整復学理論の第1回から第22回を集計する。さらに国家試験がどの項目から出題されているのかを分析し出題傾向を明らかにする。国家試験合格に必要な情報として今後の柔道整復学教育、学生の国家試験対策に役立てることを目的とした。

対象としては1～22回の柔道整復学理論のみにした。外傷別に問題数を調査し、その中から1～3番目に多い外傷のみ抜粋し、「症状」、「治療法（整復法含む）」、「分類」、「合併症」、「鑑別」の項目にさらに分ける。結果として、最も多く出題されているのは、肩関節脱臼であった。次いで上腕骨顆上骨折、鎖骨骨折の順であった。考察として、柔道整復師が臨床で実際に治療する可能性が高い外傷や、治療を行う際に最大限の注意を払わなければならない骨折が多いことが分かった。

キーワード：柔道整復師国家試験、柔道整復学理論

Trend of Questions of the National Examination for Judo Therapy Practitioners: －Special Attention Paid to Judo Therapy Theory－

Tatsuma Tanabe, You Matsumoto, Hiroyuki Osawa

Department of Judo Therapy and sports medicine, faculty of health sciences, Ryotokuji University

Abstract

The national examination for judo therapy practitioners has been carried out 22 times to date. While 1066 people sat for the 1st examination, 7102 people took the 22nd examination; the number of applicants increased significantly.

The pass rate of the 22nd national examination was 75.3%, and it was lowered compared to the 1st examination, the pass rate of which was 90.3%. However, confined to only new graduates, the pass rate of the 1st examination was 92.4% and that of the 22nd one was 91.3 percent, and there was not a big difference between them. This suggests that national examination preparations conducted at each university

and school do not work well.

This research was intended to give information helpful to the education of judo therapy in times to come and students who prepare for the national examination. In this research questions concerning The Theory of Judo Therapy were analyzed and the trend of questions was revealed.

We classified questions according to the types of trauma, counted the number of the questions for each trauma and chose the three topmost trauma types. We then classified the questions concerning the three trauma types into five categories, “symptoms”, “treatment method”, “classification”, “complications” and “discrimination”.

Shoulder joint dislocation is the trauma type about which the largest number of questions are asked, followed by humerus supracondylar fracture and clavicle fracture in the order. These traumas are treated most often at clinical settings or need to be treated with the maximum carefulness.

Keywords : national examination, Judo Therapy theory

I. 背景

柔道整復師国家試験（以下、柔整国試）は現在まで22回実施されている。第1回柔整国試では1066人、第22回柔整国試では7102人が受験者をしており、第1回に比べて受験者は著しく増加している。

その柔整国試の合格率は、第22回柔整国試では75.3%であった。第1回柔整国試では90.3%であったことから、第1回に比べると合格率は低下している。しかし、その年度に卒業する新卒受験者のみの合格率については第2回柔整国試と同じく90%をこえており合格率に変化はみられない。

柔道整復師を養成する学校では技術だけでなく、柔整国試の合格率を100%にすることを目標に掲げているところが多い。第1回から第22回の柔整国試の合格率に変化がみられないということは各学校で行われている柔整国試の対策が失敗していることを示唆しているといえる。

今回我々は、柔整国試の合格率をあげることを目標に、その傾向を調べることにした。

まず柔整国試について説明する。柔整国試は必修問題30問と一般問題200問で構成されている。出題科目は、解剖学、生理学、運動学、病理学概論、衛生学・公衆衛生学、一般臨床医学、外科学概論、整形外科学、リハビリテーション医学、柔道整復理論、関係法規である。合格基準は必修問題が30問中の8割にあたる24問以上、一般問題は200問中の6割以上にあたる120点以上取得することで合格となる。

柔整国試に出題される教科で最も多いのは柔道整復理論である。柔道整復理論は必修問題で15問、一般問題で45問、合計で60問出題されており、全出題教科の4割を占めている。

このことから柔道整復理論の出題傾向を知ることが、柔整国試の合格率向上に役立つと考え、その詳細を調査し報告することとした。

II. 目的

柔整国試に出題された柔道整復理論の出題傾向を調査し、今後の柔整国試合格率の向上を目的とした。

III. 方法

第1～22回柔整国試における柔道整復理論を対象とした。

日本柔道整復学校協会監修の柔道整復学・理論編の目次に倣い分類し、出題数が多いものを調べた。ま

た出題数が多かった上位の外傷については、その出題傾向について詳細に報告するために「分類」、「症状」、「治療法」、「合併症」、「鑑別」、「その他」に分類をした。

	受験者数	合格者数	合格率
第1回	1,066名	963名	90.30%
第2回	1,194名	1,059名	88.70%
第3回	1,213名	1,005名	82.90%
第4回	1,276名	1,063名	83.30%
第5回	1,296名	1,137名	87.70%
第6回	1,251名	1,071名	85.60%
第7回	1,266名	1,091名	86.20%
第8回	1,260名	1,024名	81.30%
第9回	1,338名	1,041名	77.80%
第10回	1,439名	1,128名	78.40%
第11回	2,454名	2,108名	85.90%
第12回	3,000名	2,215名	73.80%
第13回	4,122名	2,902名	70.40%
第14回	5,127名	3,755名	73.20%
第15回	5,944名	4,416名	74.30%
第16回	6,702名	5,069名	75.60%
第17回	6,772名	4,763名	70.30%
第18回	7,156名	5,570名	77.80%
第19回	6,625名	4,592名	69.30%
第20回	6,754名	5,227名	77.40%
第21回	6,503名	5,438名	68.20%
第22回	7,102名	5,349名	75.30%

図1. 国家試験受験者数、合格者数、合格率

Ⅳ. 結果

最も多かったのは50問出題されていた肩関節脱臼であった。次いで上腕骨顆上骨折が41問出題され、鎖骨骨折は28問であった（図2）。

肩関節脱臼の問題で最も多く出題されていたのは「症状」で16問出題されていた。上腕骨顆上骨折の問題では「合併症」が17問であった。鎖骨骨折では「症状」が14問出題されていた。

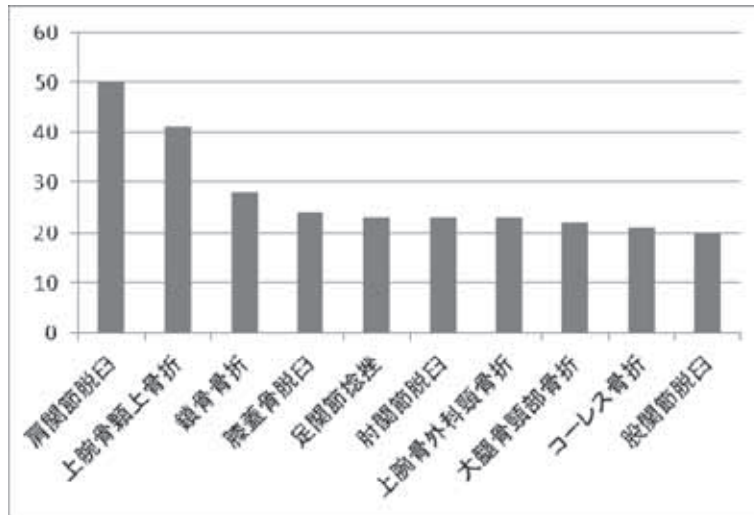


図2. 外傷10位

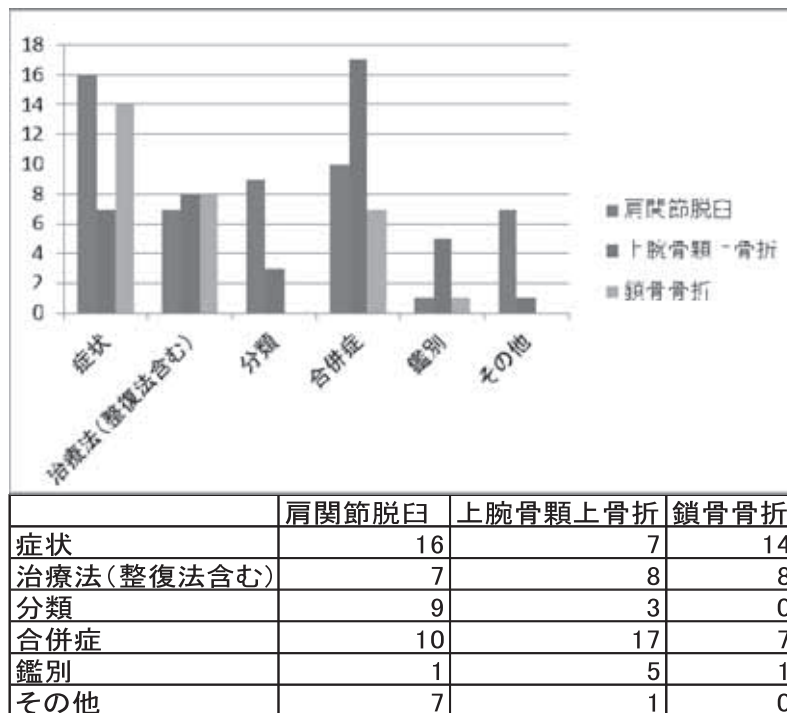


図3. 上位3外傷の分類わけ

V. 考察

第1～22回柔整国試において出題数が最も多かったのは肩関節脱臼であった。日本柔道整復学校協会監修の柔道整復学・理論編で肩関節脱臼は発生頻度が一番高い脱臼である²⁾とされており、柔道整復師が治療を行う機会が最も多い脱臼であるといえる。

上腕骨顆上骨折は小児の肘関節周りの骨折では最も多いとされる。また鎖骨骨折も全骨折の15%を占める³⁾といわれており、2つの骨折は肩関節脱臼と同様に柔道整復師が治療する機会が多い外傷である。

このことから、柔道整復師が治療する可能性が高い外傷が出題される傾向にあると考えた。

肩関節脱臼と鎖骨骨折では「症状」に関する問題が多かった。先述したように2つの外傷は、発生が多く

柔道整復師が治療をする可能性が高い。しかし、レントゲンを使えない柔道整復師は確定診断をおこなうことはできない。応急処置をする際に「症状」を把握しておくことで最悪なケースを引き起こすことを減らすのが目的であると考える。

上腕骨顆上骨折では合併症に関する出題が最も多かった。上腕骨顆上骨折の合併症は、内反肘やフォルクマン拘縮などの手術療法をしない限り永続的に症状が続く後遺症がみられることから、柔道整復師が注意をしなければならない骨折である。

今回の結果から、柔道整復理論で出題された問題は、柔道整復師が臨床で実際に治療する可能性が高い外傷や、治療を行う際に最大限の注意を払わなければならない骨折が多いことが分かった。今後も発生が多い外傷や、治療に注意が必要な外傷が出題される可能性があることから、外傷の疫学調査を知っておく必要もあると考える。

文献

- 1) 公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト3 スポーツ外傷・障害の基礎知識. 49-53
- 2) 社団法人・全国柔道整復学校協会・監修・柔道整復学・理論編、改定第5版、南江堂. 264-271
- 3) 一般社団法人・日本骨折治療学会・鎖骨骨折
<https://www.jsfr.jp/ippan/condition/ip03.html>
- 4) 柔道整復師・はり師・きゅう師・あんまマッサージ指圧師国家試験情報道
<http://www.zenjukyo.gr.jp/kokushi/01/03-1/>

(平成26年11月30日稿)

査読終了年月日 平成26年12月4日